意外と豊かで「格差も存在」

増山雄三

「縄文時代」と聞けば、私など、厳しい自然の中で、貧しいけれども格差がない平等な世界で、精神生活は極めて幼稚な段階にあって、富や権力の発生を促がす蓄積は、まず不可能だった時代たったという、遥か遠い昔のイメージしかわいてこない。

それでも、その後、各地で発掘調査が進むにつれ、「自然と共生した豊かな狩猟採集社会」というイメージが広がり、九十年代に、青森市で「三内丸山遺跡」を始め幾つかの遺跡が発掘されると、「縄文都市」とか「縄文文明」といった言葉も使われ、むしろ、それが理想郷であった様にも言われた。

だが、近年になって科学分析が進んで見えてきたのは、厳しくもなければ、理想郷でもなく、たくましく自然を利用して、生活技術

を革新し続けた暮らしぶりが分ってきだ。

この**縄文時代**は、ＢＣ一万三千年に始まりＢＣ三百年まで約一万二千年以上も続くが、その期間はおよそ六期に分けられ、各期の詳細な年代が、放射性炭素年代測定により、ある程度割り出されるようになった。

研究者によって解釈に違いもあるものの、まず「**草創期**」が約三千七百年、続いて「**早期**」が約三千五百年間あり、三期目にあたる「**前期**」が約二千年間、四期の「**中期**」が約九百年間あり、「**後期**」及び六期目にあたる「**晩期**」は、それぞれ八百年間あり、その期間は次第に短くなってきている。

明治大学の阿部芳郎教授は、「このように期間が短くなり、変化が加速している事が重要で、変化の加速は、社会の発達の加速を意味し、長ければ千五百年も同じ場所に定住した狩猟採集民は、世界的にもまれで、気候も変わる中で、長期間住み続けるために、様々な技術を生み出す必要があった」と話す。

ここで、各期毎の特徴をみると、先ず「**草創期**」は、旧石器時代に近い石やりで狩りを行ない、土器はまだ少なかったものの、次の「**早期**」になると、土器の使用が増え、貝塚も現れる様になり、第三期にあたる「**前期**」では、温暖化によって海岸線が内陸まで入り込むようになってきて、「**中期**」には集落が大規模化し、火焔型土器などのような、派手な装飾の土器が作られ始めた。

更に「**後期**」になると、塩や装身具などを地域間で分業して作り、それらを交易するネットワークが発達し、最後の「**晩期**」になると、東北地方では、精巧な遮光土器などを作った、「**亀ヶ岡文化**」が栄える様になった。

こうした縄文時代の推移の中で、従来は、この時代を、「狩猟や漁労それに採集の段階に留まっていて、社会は複雑ではなく、収穫物は公平に分けあい、身分の上下関係や貧富の差はなかった」と考えられていた。

それが今では、「温暖化で資源が増えて暮

らしは安定したが、自然の中で生き延びていくため、生活技術の革新が絶えず行われる様になり、動植物資源を上手に利用する高度な管理も行われ、『格差』も存在し始め社会が複雑化した」と考えられる様になった。

格差の存在があったというのは、墓の「副葬品」で知る事ができるが、富山市にある縄文前期の小竹貝塚では、多数の磨製石斧と共に大量の人骨が出土し、また、北海道のカリンバ遺跡では、赤漆で塗られたクシや腕輪の装飾品が見つかり、それらは、特定の個人しか持てないような品であった事から、格差の存在を示唆するものだと言われている。

ここで、縄文時代の暮らしぶりについて少し触れると、先ず住居についていえば、彼らは竪穴住居と呼ばれる家に住んでいたが、それは、地面に深さ五十糎くらいの円形の大きな穴を掘り、その周りに五～七本の柱を立て、その上に屋根をつくった。

北代遺跡では、屋根の上に土を葺いた土屋

根住居が作られ、住居の床には硬く叩き締めた粘土を敷き詰め、畳六から十二枚ほどある広さの住居の中心には、料理をしたり暖房などに使うための、石で囲んだ炉が作られ、家族四人くらいが住んでいた。

また、彼らは一体どんな服を着ていたのかと言えば、植物の繊維からとった、糸を編んだ布の服を着ていたようだが、石川県の米泉遺跡からは、漆を絞るためたまたま腐らずに残った編布が見つかり、縄文人が、布を編む技術を知っていた事が分った。

それに、動物の毛皮や、魚の皮などで作った服もあり、毛皮を鞣すために、石器や骨で作った縫い針も遺構から見つかっていて、土偶に描かれた衣服の表現を見ると、渦巻模様や丸とか三角などの、模様も付けられていた事なども分っている。

更に、食生活についてみると、主に鳥とか貝や魚それに木の実とか根菜類を食べ、遺跡の竪穴住居の中からは、アオザメ、ナガスク

ジラ、マダイ、ニシン等の魚の歯や骨が見つかると共に、クルミ、トチ、クリなどの木の実が炭化したものが見つかっているので、これらを食していたものと思はれる。

縄文土器は、これらの食べ物を煮るために使われたようで、出土した土器には、調理の時に吹きこぼれて焦げ付いてしまったものもあり、木の実は石皿と摺石で摺り潰しクッキーなどを作り、おいしく食べるため、様々な工夫をしていたようでもある。

当時は、大陸から影響を受ける事はなかったので、数々の工夫は日本列島内でのみ起っていったが、縄文の技術革新の中で、急速に解明が進んでいるのが、植物利用である。

それは、花粉分析によって、集落形成と同時に、クルミやクリなど、食品に役立つ樹木がある遺跡が発掘され、彼らが有用な木を林に仕立て管理していた事も分り、複雑な装飾を編み込んだ駕籠や、精巧な彫刻を施した上に、赤と黒の漆で模様をつけた容器などとい

った、漆製品も出土している。

近年注目を集めている手法に、土器に残る細かな空洞を観察し、製作段階で粘土に取り込まれた、植物や昆虫を調べる「**圧痕法**」があり、それによると、各地の土器からダイズやアズキの痕跡が確認され、それらは、縄文前期に中部や西関東地方などで、漸次栽培されるようになった事も分った。

熊本大学の小畑弘己教授は、土器の中のダイズは「豊穣を祈るために意図的に練りこんだ」とみるが、マメ類だけでなく、コクゾウムシやカラスザンショウの実が大量に練り込まれた土器もあり、それは暮らしに密接だったものばかりと、教授は言う。

クリなどの貯蔵倉庫を狙う、コクゾウムシが住居に集まり、カラスザンショウは防虫剤として使われたものと考えられるが、真摯に物を見つめる研究が、いま、縄文の生活を生き生きと再現しようとしている。

令和二年八月